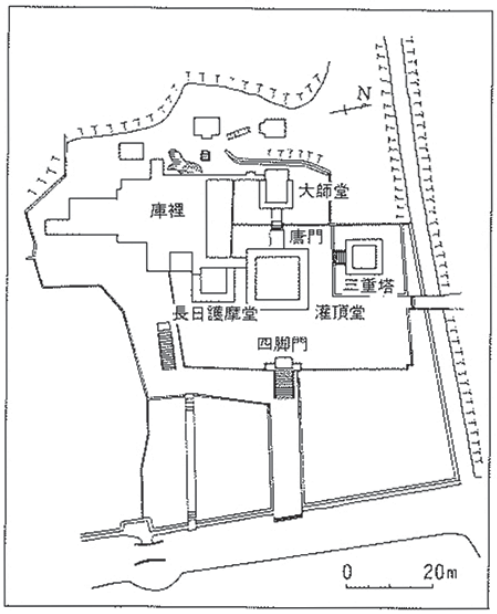
園城寺唐院大師堂

1．はじめに

三井寺で親しまれている園城寺は大津市園城寺町に在ります。長等山一帯に寺地を構え、その創立は朱鳥元年(686)と伝えられる古刹です。平安時代の貞観元年(859)に天台別院となり、円珍が別当として園城寺を再興しました。そして、円珍は唐坊を創設し、唐より将来した経典・法具類を納め、伝法灌頂の道場としました。尚、唐坊は現在唐院と称されています。

文禄4年(1595)豊臣秀吉により園城寺のほとんどの建物が破却されました。その後慶長3年(1598)になって復興の許可がおり、唐院は場所を替えて最も早く再興に取り掛かられました。それは、大師堂が宗祖円珍（智証大師）を祀る廟であり、園城寺の中で最も重要な建物であるからです。このことは棟札に「宝殿」と記載されていることからも理



図－1　唐院配置図(修理工事報告書より)

写真－1　竣工　正側面全景

1990. 10. 31

財団法人　滋賀県文化財保護協会

解出来ます。尚、灌頂堂は棟札に「拝殿」と記されており、大師像他を礼拝する建物としての性格も備えていることが分かります。

さて現在の唐院は築地塀で囲まれ、東面して四脚門・灌頂堂・唐門・大師堂（いずれも昭和42年園城寺唐院として重要文化財指定）が一直線上に並び、灌頂堂の北に三重塔（重要文化財）、南に長日護摩堂（県指定）が建っています。（図－１　配置図参照）

大師堂（写真－１）は昭和63年４月より平成２年３月まで半解体修理が行われました。この工事により慶長３年建立当初の形式とその後今日に至るまでの修理が明らかとなり、平面の変遷が分かりました（図－２）。尚、本工事とともに唐門の屋根替（檜皮葺）と毘沙門堂（重要文化財）の屋根替（檜皮葺）・彩色工事等を行いました。

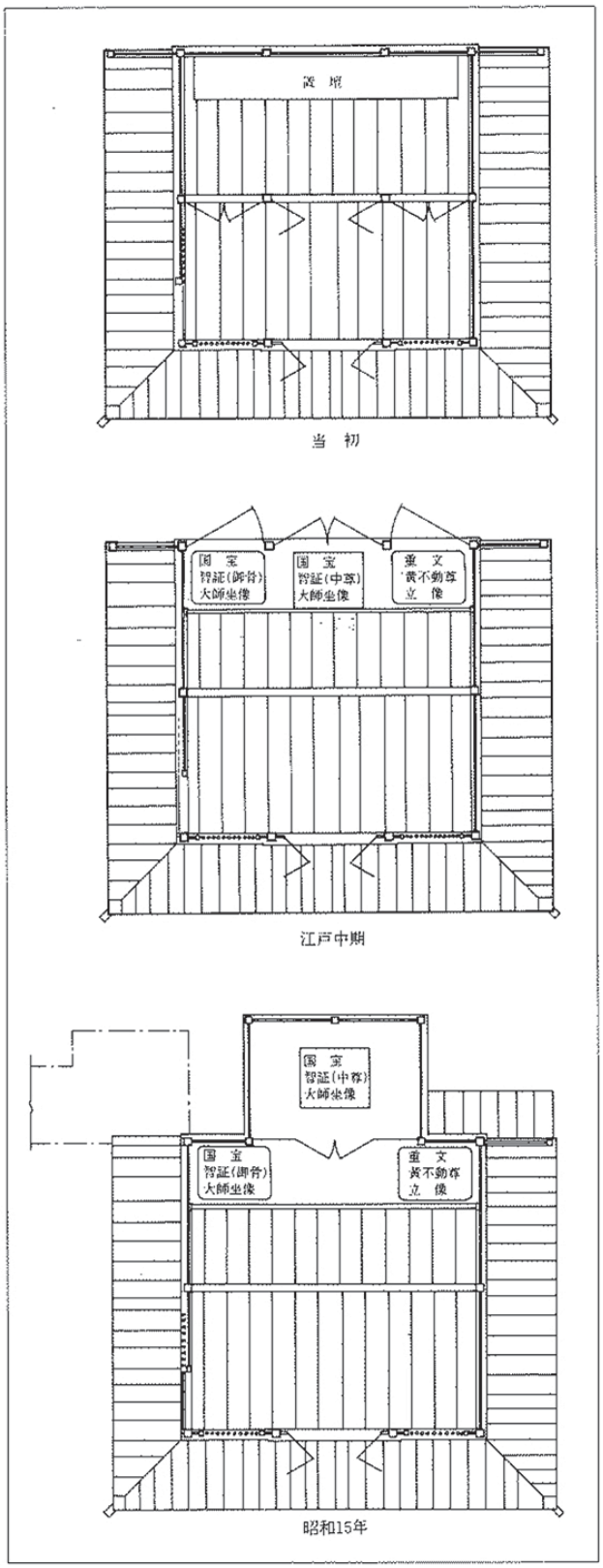
本稿では大師堂の建築的特徴、修理の経緯、そして中世の様子について記そうと思います。今回の修理に関する詳しいことは『重要文化財園城寺唐院大師堂・唐門及び毘沙門堂修理工事報告書』（平成２年３月）に記述しています。

２．慶長建立時の大師堂

大師堂は慶長３年に建立されました。正面３間・側面２間、屋根宝形造・檜皮葺、面取り角柱上に舟肘木をのせ、二軒疎垂木、素木造りの簡素な小堂です。正面と両側面の三方に縁を巡らし背面柱筋に脇障子を設けています。正面中央間両折桟唐戸・両脇間連子窓・南側面前間遣戸片引、他はすべて竪嵌板張りです。

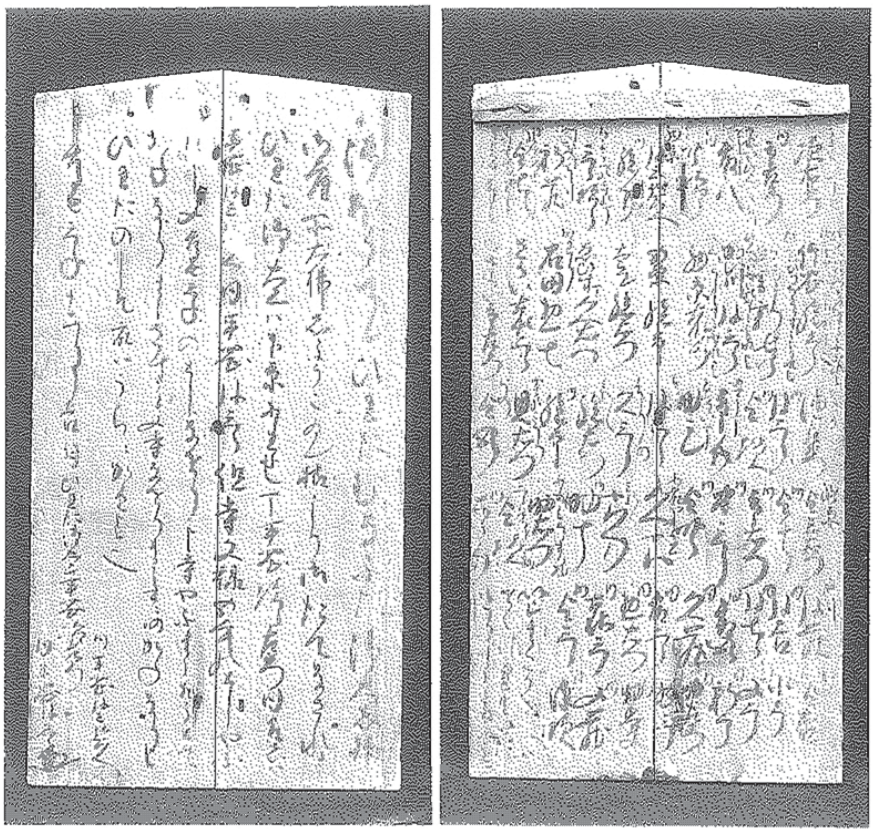
内部では、側面中央柱筋に２本の柱をたて、柱間に両開の扉を設け、前を外陣、奥を１框分上げて内陣とし、内外陣を完全に区切っていました。内陣後方には置壇を設け、その上に中尊大師・御骨大師・黄不動尊の三尊を祀っていたと考えられます。天井は内外陣とも棹縁天井です（図－２　当初）。

慶長３年建立の棟札（写真－２）には「御

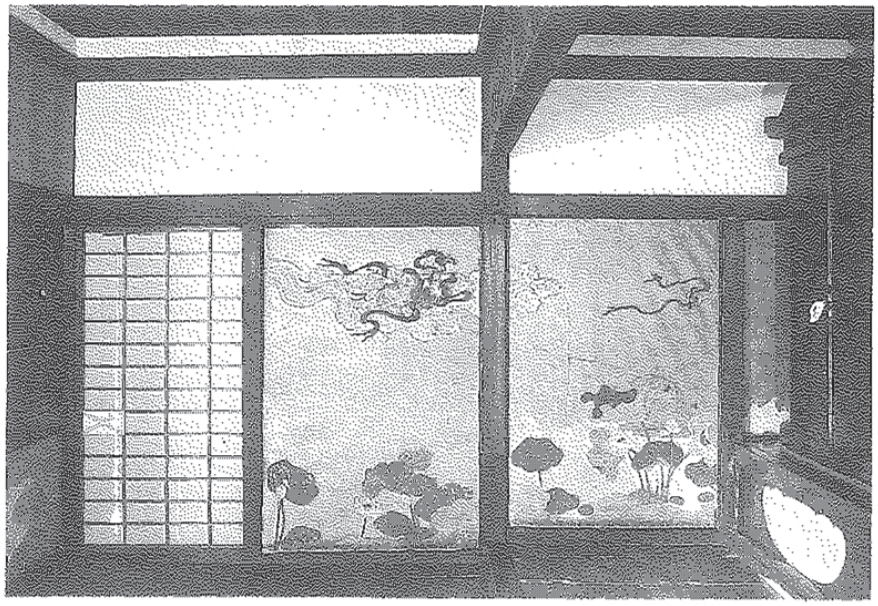


図－２　平面変遷図（修理工事報告書より）

ほうてんひわたむなふた（以下略）」と記され、裏面には60人の職人の名を連ねています。また、『園城寺再興略記』で工事の経緯が分かります。すなわち、慶長３年10月18日に釿始の儀が行われ、11月５日に唐院の敷地整備が



写真－2　（表）　慶長3年　棟札　（裏）



写真－3　修理前　内部・南側面

始まり、11月27日に唐院柱立、慶長4年5月27日唐院上棟、8月24日法養法事が行われて完成しました。

3．後世の修理

慶長再建後今日までに幾度かの修理を受けていることが今回の修理で分かり、棟札や墨書等の資料により年代が確かめられるものも有りました。修理の内容は主として屋様替や縁板の張り替え等の小修理ですが、江戸時代中期と昭和15年の2度大きな改造が行われています。

屋根替を主とした修理は寛永18年(1641)・元禄8年(1695)・享保12年(1727)・宝暦12年(1762)・寛政元年(1789)・明治23年(1890)・昭和35年に行われています。

4．江戸時代中期の改造

内外陣境に設けていた柱2本と扉を撤去してそこに虹梁を架け、内陣・外陣を一室とし、内陣奥に造り付けの須弥壇を設けました。祀っている3尊の厨子を造り、須弥壇上に安置しました。南側面前間の片引戸を外引きに、背面板壁を扉に変更し、内部の板壁を障壁画で飾りました（写真－3、図－2　江戸中期）。

これらの改造の時期は明確ではありませんが、内外陣境の虹梁の渦や若葉の絵様等から江戸時代中期と推測されます。

ところで、園城寺では円珍示寂(寛平3年 891)後50年ごとに斎忌が執行されており、上記の大師堂の各修理は概ね斎忌に合わせられているようです。ちなみに平成2年は1100年の斎忌に当たります。

斎忌に関する資料が園城寺に遺されています。その中で『曩祖斎諱記』には 700年斎忌から 850年斎忌までの記録が載っています。元文5年(1740)の 850年斎忌は唐院でも行われ、大師堂と灌頂堂の堂内を荘厳にした指図

があります(図－３)。その図では大師堂内外陣境の柱は描かれておらず、須弥壇上には厨子の平面に似せた輪郭を描き、中に仏像の名を書き込んでおり、上記の改造内容の一部が盛り込まれています。

この厨子について、『園城寺再興略記』には元禄年中に三尊の厨子を造るための白銀が寄付されたことが記されています。元禄時に三尊を安置する厨子が何等かの理由により必要になったことが分かります。

以上より改造は元禄から元文５年までの約50年の間に行われたことになります。

５．昭和15年の改造

背面の中央柱２本を撤去して、柱間を広げて新たに柱２本を入れ、奥行１間の保存庫を造りました。保存庫に中尊大師を厨子ともに納め、半永久的な保存を図りました（図－２昭和15年)。この工事は1050年斎忌の記念事業として行われたものです。

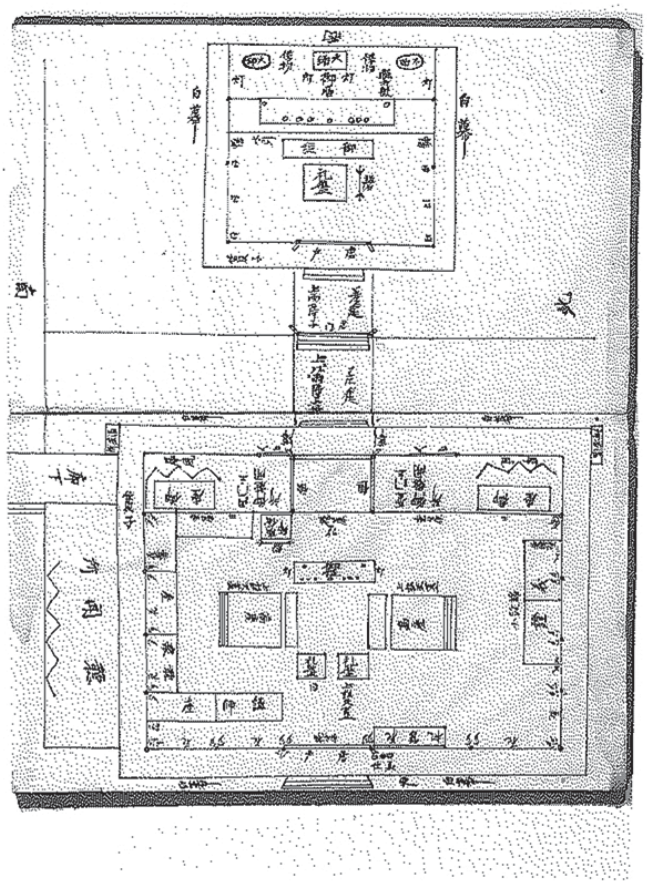
保存庫は、レンガ造基礎の上に鋼板で外壁を造り、内部は桐板張りで仕上げられ、外部は大師堂に相応しいように木造で仕上げ、屋根は檜皮葺で大師堂から一体に葺き降ろしています。

この改造は柱・舟肘木・軒桁・垂木などの当初材を撤去してまで行われており、過去の災難から守り続けてきた智証大師像が園城寺にとっていかに大切かを物語っています。

６．今回の修理

昭和42年の重要文化財指定後初めて行われた工事で、柱と軒は解体せずそれ以外をすべて解体する半解体という方法で工事を行いました。

昭和15年のときに撤去された柱・軒桁・舟肘木を元の位置に復原し、ほぼ現在の形となった江戸時代中期の姿に復旧整備しました。更に、前述の保存庫を解体して、新たに規模を大きくした保存庫を取り付けました。間口は２倍近く広げ、奥行は２割程深くし、中尊大師だけでなく御骨大師と黄不動尊の二尊も



図－３　『曩祖斎諱記』(園城寺蔵）唐院八講堂荘厳圖

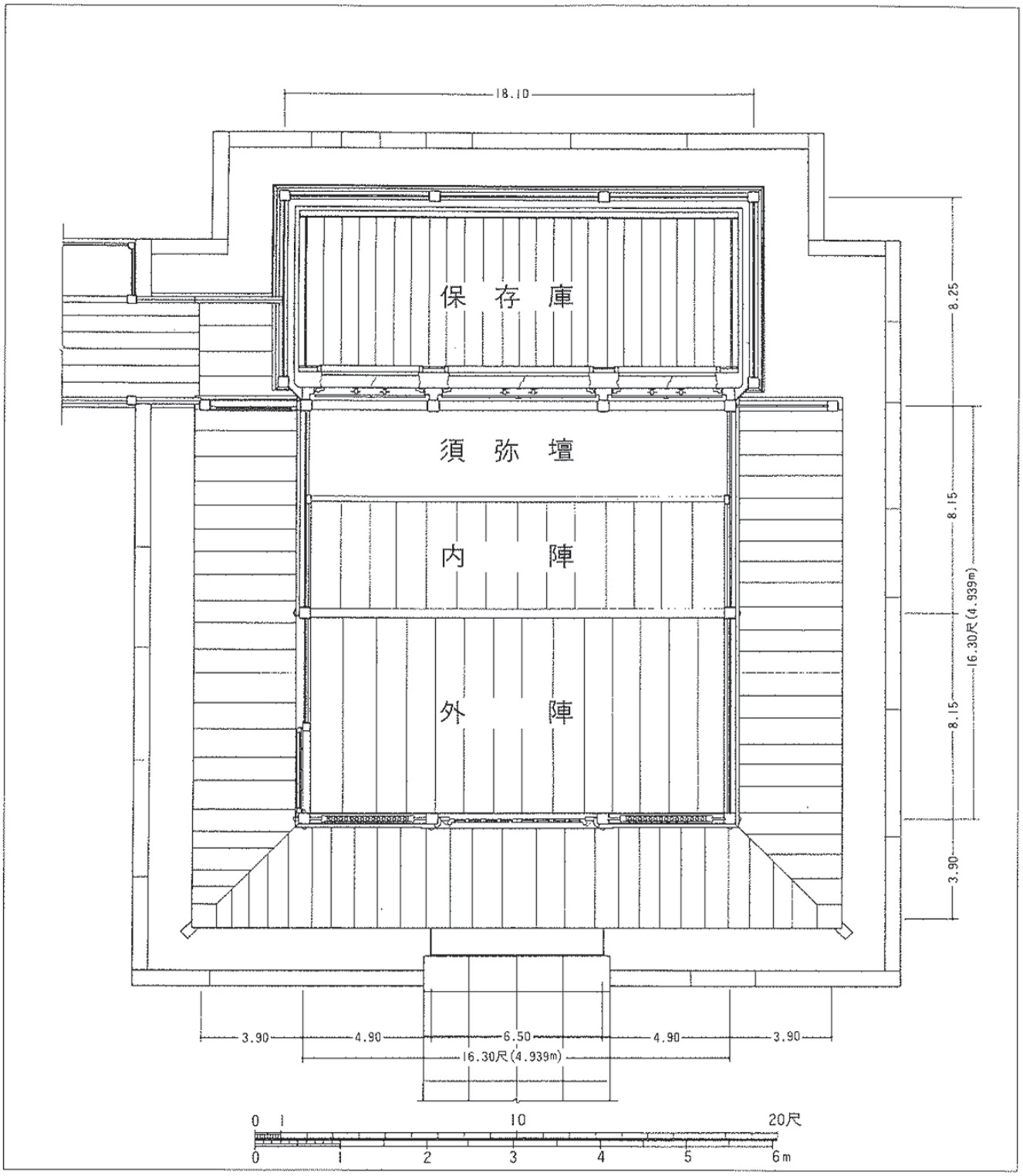
厨子ともに保存庫に納まる大きさとしました（図－４)。コンクリート基礎上に鋼鉄パネルで壁体を造り、内部・外部は前記同様の仕上げとしました。

保存庫を拡大することで垂木が取り外され、木負・茅負が切り縮められる結果となりました。

７．中世の大師堂

唐坊は清和天皇より下賜された仁寿殿を用いて創設されたと言われています。その仁寿殿がどのような建物であったかは判然としません。唐院の様子が具体的に把握されるのは中世になってからのことで、中世園城寺の境内状況を示す重要文化財紙本著色園城寺境内古図でよく分かります。これは鎌倉時代末～南北朝初の伽藍を描いていると考えられています。

また、『寺門伝記補録』第九「三院図説」には「(前略)大門の差入、南側に唐院、北の門、宝殿、南に向て立つ、智証大師の真容同く御骨の像並に黄不動尊を安置す、この院は

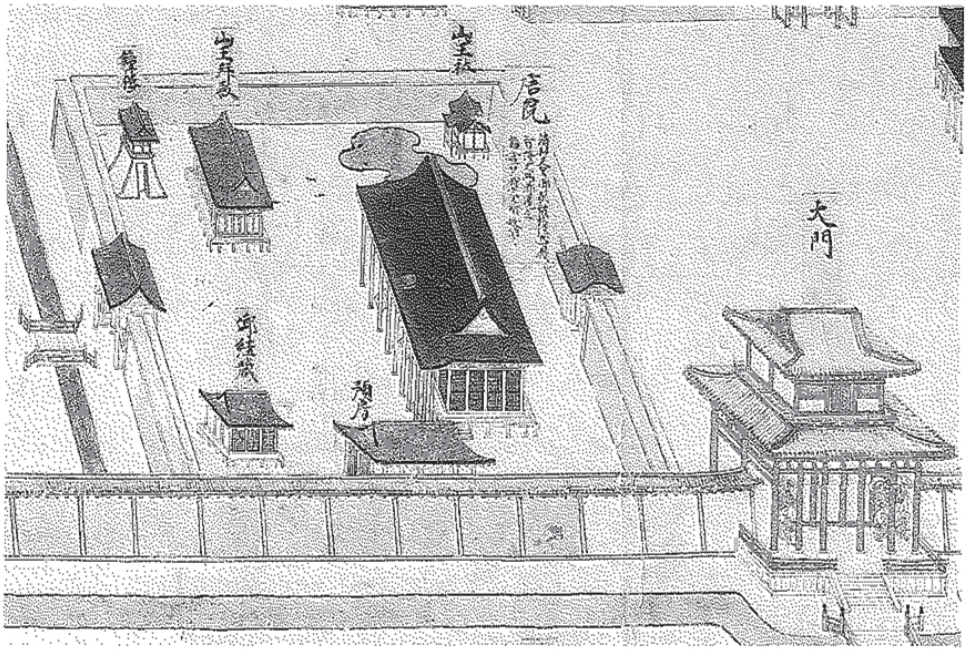


図－4　竣工平面図（修理工事報告書より、大上直樹氏作図）

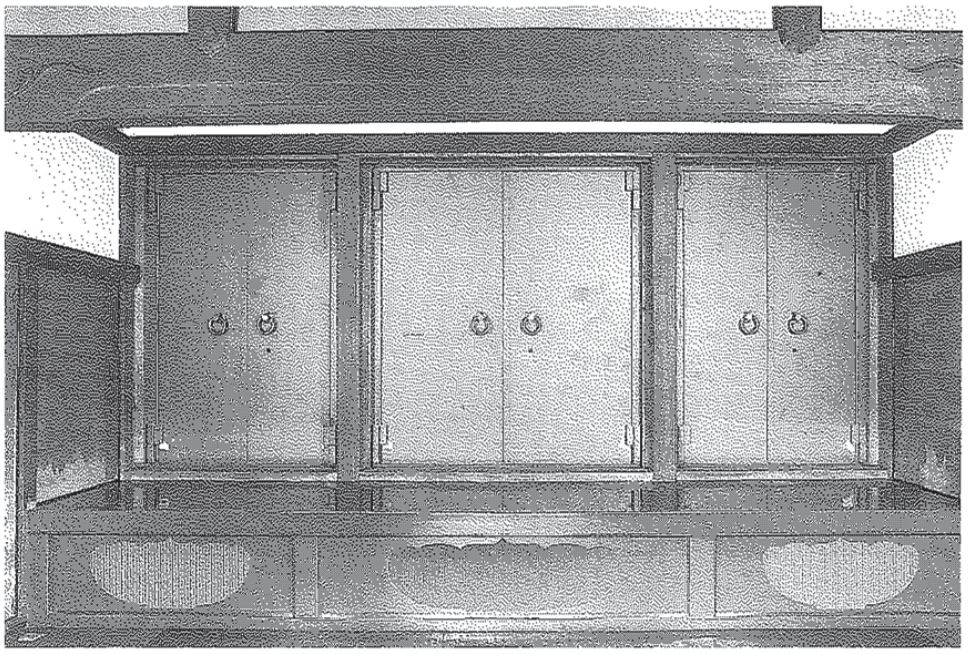
清和天皇貞観元年　詔ありて仁寿殿をここに移し建つる所なり（後略）」と記述されています。この宝殿が大師堂に相当します。

古図に描かれた唐院は周囲を塀で囲まれ、北と南に門を開き、宝殿（大師堂）の他、山王社・山王拝殿・鐘楼・御経蔵・預房が建っています。さて、宝殿（大師堂）は正面９間・側面４間、屋根入母屋造檜皮葺で四方に縁を巡らし、正面には３ヶ所階段を設けています（図－５）。この３ヶ所の階段は安置する三尊に対応していると考えられます。

古図に見られる大師堂は現在と全く形が異なって描かれており、大規模な建物で、単に三尊を安置するだけの堂でなく、唐院本来の



図－5　紙本著色園城寺境内古図・中院(園城寺蔵)　唐院部分



写真－4　竣工内部

役割である経典の校合・収蔵等が可能な大きさの堂であると思われます。

8．まとめ

大師堂は宗祖智証大師を祀る廟で、園城寺で最も大切な建物です。慶長3年建立時は内外陣を扉で完全に区切り、内陣全体が三尊を奉安する厨子と考えられていたと思われます。ところが元禄年中に三尊の厨子造立のための寄付があり、大師堂の役割・性格に変化が生じてきたと考えられます。元文5年以前には内外陣境の区切りがなくなって一室となり、須弥壇や障壁画で堂内を荘厳にしました。このことは堂内に人の参入を前提として行われたと理解出来ます。元文5年の850年斎忌では長吏と円満院門主が大師像礼拝のため堂内に入っています(『曩祖斎諱記』)。

以上述べてきたように大師堂は、慶長再建で中世とは異なった形式で造られ、機能が大師他二尊の奉安にありました。江戸時代中期には堂内で儀式が出来るよう改造され、大師堂の役割に変化が生じています。

今回の修理では大師堂本体に接して後方に保存庫を建設し三尊の永久的な保存を図りました。その結果大師堂内部には信仰の対象がなくなり、大師堂はそれらを礼拝する建物に変更されました（写真－4）。

建物の建設当初の形・機能をそのまま将来へ維持していくことは多種多様な条件から困難であることを物語っています。

（松岡　高弘氏提供）